昆虫少年の夢の続き

会員　関　一磨（70期）

僕はクラスに一人はいる「昆虫博士」だった。

故郷は長野県北信地区。放課後は河川敷のヤナギの木の下でクワガタを採り，空き地でバッタを追いかける少年だった。愛用のノートも，昆虫写真の表紙の「ジャポニカ学習帳」だ。

僕は，祖母が持ってくるインスタントコーヒーのカップが大好きだった。

祖母は虫かごを持たないが，僕が喜ぶことを知って，山での農作業，墓掃除の際に見つけてくれた虫をカップに入れて持ってくるのだ。

嬉しい虫は，金色の体毛と隆々の頭部を持つミヤマクワガタと，漆黒のメタリックボディと朱色のお腹のアカアシクワガタだ。いずれもやや高山性の種なので，平地ではなかなかお目にかかれない。

祖父母は時に僕を山に連れて行ってくれた。

ある日，祖母は，軒先にできたアシナガバチの巣を事も無げに採取し，ハチの子（幼虫）を取り出してフライパンで炒め始めた。

立ち去ろうとした僕に，祖母は冗談気味に言った。

「ハチの子を食べないと，山に連れてってあげないよ」と。

祖母の山で昆虫採集をしたい僕は，冗談と理解しつつも逡巡した挙句，目を瞑りながら炒められたハチの子を一匹ヒョイと口に入れた。プチっとした触感の後，ピーナッツと鶏肉を混ぜたようなクリーミーな風味が広がった。美味しい。

祖母は約束通り，僕を山に連れていってくれた。

あの時，食べなくても連れていってくれたであろうことは僕が一番理解している。

結局僕がハチの子を食べてみたかっただけなのだ。

ハルジオンの蜜を吸うベニシジミ，白樺の倒木を闊歩する孔雀青に水玉模様のルリボシカミキリ，睡蓮の下から潜航艇の如く浮かぶゲンゴロウ，門限を告げるヒグラシ，夏の終わりのツクツクボウシ，いずれも僕が愛してやまない虫である。

血眼で探した水生昆虫の王様のタガメは，見つからず仕舞い。タガメが長野県で絶滅種指定されたことを知ったのは，大人になってからである。

そんな僕も，中学生の頃から徐々に虫から距離を置くようになった。

周りの友人も虫に関心を示さなくなり，当時の僕は，虫好きを全面に出すと「異性からモテないのではないか？」と思春期の思い込みに陥った。残念なことに，虫から離れてもモテることはなかったのだが。

とはいえ生物への関心から高校は理数科に進学したが，理系の授業が肌に合わず文転をし，紆余曲折あって東京で弁護士をしている。少年時代は昆虫学者に憧れていたのに，人生はわからないものである。僕はチョウのように「完全変態」したのかもしれない。

自分に正直になった大人の僕は，夏になると一人で昆虫観察に勤しんでいる。

大都会東京には，ヒトだけでなく多種多様な虫が生きている。都心からほど近い場所で，子供たちが大好きなカブトムシやノコギリクワガタに会える。

月の女神Artemisの名をかつて学名使用していた，薄水色の可憐な蛾であるオオミズアオも都心の街灯にヒラヒラと舞い降りる。

都内某所のヤマトタマムシ

虹色に輝くヤマトタマムシも，都内でひっそりと命を紡いでいる。エノキの大木を見かけたら空を眺めてほしい。樹上にキラキラと舞う美しいその姿を見ることができるだろう。

ヤマトタマムシは法隆寺の「玉虫厨子」が有名だが，古くから人々を魅了し，見つけると幸運が訪れるとして「吉丁虫」とも呼ばれている。

今でもインスタントコーヒーのカップを見ると，昨年天国に旅立った祖母との思い出が駆け巡る。

さて，今年の夏はどんな出会いがあるだろう。楽しみだ。